

第九回九州戯曲賞審査員選評

佐藤 信

一昨年につづいて、二回目の九州戯曲賞審査会でした。最終候補作五作、今年も「他人ごとではなく」楽しく読みました。まさしく「他人ごとではなく」です。他でもないこの時代、他でもないこの場所で、ひとり机に向かい戯曲を創作する。なんのために？ 誰に求められて？ その困難から多少の糧は得られるのか。劇作家を称する人はたくさんいます。でも、ほんとうの意味で劇作だけで生計をたてている職業劇作家は、いまでも十本の指にみえないでしょう。つまり、候補者と審査員の間に、こと劇作家という立場に限っては、思われているほどの隔たりはないのです。

宮田晃志さん『ヒトツ目の街』。「ヒトツ目の里」という奇想を用いて描かれた少年時代。遠い日々のあるこれを丁寧につむいで、誰もが大人になってから感じているに違いない、幼い目を通した世界の不思議さ、割り切れなさ、何か忘れ物をしてきたようなもどかしさが、うまくとらえていると思いました。「喧嘩する時は理由があっても、仲直りするには理由は要りません」……なるほど。

山口大器さん『量子の歌声』。五感を失い広大な宇宙にただよう。つまりそれは、いまの君たち、ぼくたちのことだよ、おそらく。そんな物語を頭の中のものとしてではなく、ひとつひとつ実証的に語ろうとする誠実さ、あるいは意図せずに軽々とそれやってみせてしまう感覚の切れ味に、思わず肯きました。脱出＝誕生のイメージは、大げさではなく、見知らぬ時代の到来を予見しています。激戦を制しての第九回「九州戯曲賞」受賞、おめでとうございます！

日下渚さん『サヨナラ、我が家。』。一軒の家とひとつの家族。時の歩みを通して、長い間、自分たちのもっとも深いよりどころだったはずのその場所が、いつか周囲から失われていく。十年後、もしかしたらこの物語そのものが、もはや成立しなくなっているかも知れない。そんな社会の様相を、作者の的確なせりふ術がさりげなく切り取ります。

「(皆の顔を見て) 大丈夫や！ うん、大丈夫」「お父さん、何の根拠もないやろそれ……」。

中島栄子さん『BERLIN』。東西冷戦以後の世界に、ユーロ施行後、闇の両替商たちはどこに行くのかという独自の視点を引っさげて、真正面から取り組んだ意欲作。まずはその気概に圧倒されました。「崩壊」した東側世界に現実に暮らしていたひとりひとりの声までたどり着くには、まだまだ長い道程が必要だとは思いますが、もう二歩、三歩先のこの作の完成が見たいというのが、審査にあたったぼくたちの一致した意見でした。

松岡伸哉さん『海が降った夏』。ふるさとへの帰還。地域語の弾んだ会話が織りなす物語から浮かびあがるのは、現在の「都市」と呼ばれる場所をかたちづくっている人々の、繊細な気持ちの揺らぎの景色です。終盤に登場する「楓」という名の東京からの侵入者のなんともやり切れない寂寞感が、作者のつくり出した意図であったとしたら（たぶん間違いないと思いますが）、その炯眼、恐るべし、です。

横内謙介

私は『量子の歌声』と『BERLIN』の二作を推した。最終投票に『量子の歌声』が残ったので、そこではこれ一本を強く推した。この二作、ともに欠点は少なくないのだが、作者にとっても謎であることを、戯曲を書くことによって、なんとか掴み取ろうとする迫力とオリジナリティを感じた。

そういう挑戦的で不確かな創造に対して、作者がすでに掴んでいることを、巧みに面白く書く、というアプローチも劇作にはあって『サヨナラ、我が家。』、『海が降った夏』の二作はそちらの方向の秀作であった。とくに『サヨナラ、我が家。』は同じ家の中で、次々に時代を逆行させてゆく、という奇抜な手法を取りながらもリアリティを損なわずに、上手くまとめられていた。その技量は、作者の可能性を充分に感じさせるものだった。

ただ不満を言うなら、このリアリティ派の二作において、主人公の動きがとても鈍く、その存在が鮮やかでないことが私にはとても残念だった。二作が実験的な作品でないことは明らかで、だとすれば古来から演劇が頼りにしてきた、観客の共感というものを大事にすべきだと思うのだが、肝心の主人公に対して、私には感情移入が起こらなかったのである。主人公とか脇役とか、そういう図式を否定するという強い意志があれば別だが、良い役者をキャスティングする為にも、何をおいても主役は面白く書いて欲しい。

一周廻って新時代のソフトアングラと名付けたい『ヒトツ目の街』はとても興味深く、この作者の進む道を見てみたい気持ちにさせられた。しかし、ここでも趣向は凝っているのに、主人公が何とも魅力に乏しく歯痒かった。

芝居書きは、もっと人間に惚れているか、もしくは絶望しているべきだ。自戒を込めて、そう思った。

しかし、その立ち上げからこの賞の選考に関わっている者として、今年の商品のレベルが総じて高かったことがとても嬉しかった。

松井周

『ヒトツ目の街』

主人公が「よそ者」となって、ある村に入っていく、主人公にとっての「よそ者」に出会う話。主人公の記憶をさかのぼる形で事実が明らかにされていくわけですが、進めば進むほど違和感が増しました。なぜなら主人公の記憶に基づくのなら、すべてがどうしても言えそうだから。「偏見」というテーマとこのスタイルを結びつけるには一工夫必要だと思いました。また、主人公とその父親や母親との関係が大雑把であり、主人公の偏見がどのように生まれたのかがわかりにくかったです（父親が差別的であり、母親が被差別的な立場なら、その子供は複雑な内面を持つと思われる）。仮面をつけた子供というアイデアは面白いのですが、使わないほうがよりストレートに「他者」と出会えたのでは？それに、子供だったらそのようなアイテムにはすぐに飽きてしまうのでは？とにかく、最大の問題は主人公の記憶をベースに「偏見」の物語を進めるスタイルを取ったことだと思います。もしそうするなら、この二倍の長さで、後半は村の子供達から見た主人公を描いたほうが良かったのでは？あるいはタネが明かされるエピローグをもったいぶらずに前半を持ってきて、両方の視点から交互に物語を描いたほうが良いのでは？と思いました。主人公を明確に「信用ならない語り手」とするなら、そこで初めてお互いの視点の差がよくわかるのではないのでしょうか。

『量子の歌声』

一度死んで生まれ変わろうとする者たちの魂？量子？が五感を獲得していき、出産という出口に向かって準備を進めるというアイデアは面白かったです。そのときに前世の記憶が蘇ってくるという発想も。ただ、輪廻の可能性のある三人の子供のうち、誰が生まれるのかということに量子力学の「状態の重ね合わせ」のアイデアを使う必要があったのかは疑問です。容器になる肉体を三つの魂が奪い合うという発想じゃダメだったのか、あるいは、もし量子力学の特徴を使うなら、観測される時点をもっと明確にしても良かったのでは？名付けるということは観測とは違うし、三つの魂とは全く関係ない名前を付けられる可能性もあるわけだから。なぜトコマが生まれるのかはやはり疑問です。

しかしながら、このさまよえる三つの魂の前世のエピソードはそれぞれ面白かったです。ディテールが細かく、生きていた時代の空気感や個人が抱える問題を浮き彫りにしていたように思います。そこに出てくる「他者」をわずかな筆致で描く技術があります。チャレンジングなスタイルとそのディテールの細かさは受賞に値すると思いました。おめでとうございます。

『サヨナラ、我が家。』

田舎の空き家をどうするか？という現代的なテーマで描かれた作品でありながらも、もの足りなさが残りました。家やモノと結びついた人物たちのふるまいを丁寧にとどけていき、年代を行ったり来たりするスタイルは安定しています。父母や兄妹もそれぞれ特徴があって面白いです。長女と次女が同時期に妊娠して帰郷し、それを両親が迎える場面の台詞などから人物が見えてきます。テーマでもある実家の空き家をどうするかの話し合いも面白く読みました（ただし、兄妹がなぜ意見が違うのかを明確に表せているかは疑問です）。だからこそ、時間をさかのぼっていった先に出てくる、初めてこの家に両親がやってきた頃のエピソードや子供時代の兄妹の描写が、テーマに対する別の視点や事実を引き出すのかと思いきやそこまで至ってはいなかったように思います。どちらかというといくアでノスタルジックな思い出を愛でるような方向に行ってしまうと、もったいないと思いました。この家にまつわる記憶の半分が隠されて、過去が美化されているよう。

そのように物足りないと思ったところは多かったのですが、母親がカレンダーに書いていたメモのエピソードによって、グッと全体を締めるような構造は鮮やかに決まっています、五作品中、唯一「終わり感」がありました。なので、はじめは推していたのですが、さらにもうひと押し何かという部分は見つからず、となりました。

『BERLIN』

ドイツ統一やユーロの流通をベースにして、根本的な変化に翻弄された人々を描くというスケールの大きさに惹かれました。けれど、「(アクション)」とだけ書かれたいわゆる格闘シーン？のト書きや、状況の説明だけで費やされる台詞が多く、描かれた登場人物が普段どのように生活し、行動しているかがよくわかりませんでした。とはいえ、バナナというアイテム1つが人物それぞれの食欲と東ドイツの経済を結ぶ媒介になっていたのは面白かったです。また、薬の治験のエピソードが東西ドイツの経済格差や差別を浮き彫りにするというアイデアも素晴らしく、人物の行動を左右する要素として機能していました。しかし、後半に出てくる兄弟におけるミステリー仕立てのトリックは必要だったのかは疑問です。彼らをそのまま、ドイツ統一の悲劇を体現する存在にはできなかったのでしょうか？後出しジャンケンのようにトリックを仕掛けると、都合がいいと思ってしまう。それでも、このスケールの大きな題材で何が何でも物語を紡ぎたかったという熱意が台詞に落とし込まれていることは評価できると思います。

『海が降った夏』

田舎の実家で、家族や友人に対する承認欲求を満たされて、再び都会に帰る「海」という人物は、もしかしたら現代の若者を象徴しているのかもしれませんが、その虚しさを描くわけでもなく、ちょっと捉えどころがないという印象です。同じ場所での過去と現在を重ね合わせるようなシーンのつくり方は演劇的で面白いけれど、今ひとつ効果がわかりま

せんでした。重ね合わせないことでも描けるのでは？と。台詞の連なるリズムは小気味よく、言葉のディテールもリアリティがあると思います。

全体的には、構造（時間の重ね合わせによって過去の事実が明らかになる）があって、言葉のディテールが細かいのだけれど、そこで止まってしまっているように感じました。

「海」がどんな問題を抱えてどう行動するのかがもっと知りたかったです。死産の姉の問題が実際にはどのように「海」に作用したのか？あるいは、その死産の影響は周りの人にも影響したのか？ミステリー方式で事実が明かされていくにもかかわらず、それが現在の「海」にどう影響しているのかを読み取るのが難しかったです。

また、父の不在でミスリードを誘ったのはどうしてなのか疑問です。父の不在はもしかしたら「海」の人格や行動を左右するかもしれないと読ませておいて、それをなかったことにしてしまうのはフェアじゃないと思いました。そうするとますます「海」はどんな問題を抱えているのかよくわからないからです。すべての条件や前提が前半に提示された上で、さて「海」はどう行動するのだろうか？という順番でこの作品をもう一度読んでみたい気がします。

中津留章仁

『量子の歌声』は、過去に生きていた意識（記憶）たちが宇宙を彷徨い、人間の五感を手に入れていくことで次の生命の誕生へと繋がっていくという劇世界のアイデアに、類い稀なるセンスを感じました。胎児は必ずしも生きたくて産まれる訳ではなく、無条件にひとつの意識が選ばれ生まれるという点にある種の残酷性を感じました。意識（記憶）たちは生命誕生の期日が迫ると生を肯定的に捉えようとします。当初は、先述の残酷性との間に生じる葛藤への言及が、少し物足りない気がしました。しかし、意識（記憶）は一回の生の蓄積ではなく、登場人物たちよりも更に過去の意識たちが生を渴望し、それが発露しているという解釈にシフトして、この点は解消されました。終盤には十分なカタルシスがあり、この難しい世界観を描ききる手腕は見事でした。山口さん、本当におめでとうございます。これからのご活躍を期待しております。

『ヒトツ目の街』は、差別意識を寓話的な設定を用いて表現するという構成に才気を感じ、独特のホラー色にも好感を持ちました。様々な作品で扱われている差別という命題に対し、作者ならではの視点や感性がもう少し感じられるとよかったですと思います。

『海が降った夏』はせりふが秀逸で、各登場人物の繊細な語順と言葉選びの描き分けに感嘆しました。方言を用いていますが、作品として地域への拘りやアイデンティティを描けるとよりよかったですと思います。

わたしは『BERLIN』と『サヨナラ、我が家。』を推しました。『BERLIN』は荒削りですが、壁崩壊とユーロ通貨導入という激動の社会に翻弄される人たち、という題材に感銘を受けました。作品から浮かび上がるのは、社会の価値基準や道徳的価値観への強烈な不信感、認めたくなくても受け容れて生きてゆかねばならないという絶望感、抗う意志までもが奪われていく底知れぬ無常感です。現在の日本を鮮やかに照射していると思いました。そこにあるのは、人間とは一体何であるか、という数多の劇作家たちが抱える永遠の大命題に対し、拙いながらも果敢に挑戦し何かを掴もうともがき苦しむ、ひとりの誠実で美しい劇作家の姿でした。指摘できる箇所は山程ありますが、それは他の審査員の方々にお任せしようと思います。この劇作家の登場にわたしは歓喜し、今回はこの上ない賛辞を送りたいと思います。

空き家問題を扱った『サヨナラ、我が家。』には、最も高い筆力を感じました。作者は方言から沸き立つ風土の匂いを熟知しており、地域への意識の高さが感じられる点の評価しました。方言が失われつつある現在、また地域の公共劇場が東京から演出家と俳優を呼んで演劇制作を行う中、地域で活動する劇作家が方言を選択する必然性に強く共感します。地震のくんだりなども盛り込まれ、地域を意識しながらも普遍的な主題へと昇華させる作者の企みは、居住地を問わず全ての劇作家が対等であるという意思表示であり、たおやかな作品の質感とは裏腹に、志の高さと品格を感じました。主人公がもっと抗い、その上でどう納得させるかという作業で、この作者にしか書けないせりふに行き着くような気がしました。そのとき、この題材を選んだ真の意味や、書きたかった人間の本質に迫れるのではないかと感じました。

桑原裕子

『ヒトツ目の街』

「ヒトツ目の化け物」に恐れていた主人公が、実は反対（ヒトツ目たち）の視点から見れば「フタツ目の化け物」として恐れられていた…という「価値観の逆転」は、描く時代によって人種差別やマイノリティへの優生思想など、様々な社会問題に投影して見ることの出来る面白い題材だと思います。

その違いとどう向き合うのか。「お互い知らずに生きていれば良かった」と安易に引き揚げず、もっと掘り進めてみてほしいと思いました。

『海が降った夏』

身内同士の会話というのは、とりとめがなく、あちこちに飛び、曖昧に立ち消え、なかなか本筋に辿り着かないもの。作者はそういうやりとりを普段からよく観察していて、浮遊する会話の可笑しさや面倒さを、リズムカルに描く力があると思いました。

「海ちゃん」という若い女性のつかみどころのなさもうまいと思います。でも、もしかするとそれも一種の類型で留まっているのかな、という気もしました。そう感じた理由のひとつに、海の内に秘めた想いを引き出そうとする女友達の楓が、ちっとも友達に見えなかったということがあります。浮遊する海の心を作者自身が持てあまし、楓という人物を使って強引に説明させてしまった気がしたのです。

女性を魅力的に描く作家さんだと思うので、フクザツな女心をその手に掴むべく、これからも追求してくださいませ。

『BERLIN』

作者の選んだ題材に強く惹かれました。

ベルリンの壁が崩壊し、分断されていた世界がまた調和を取り戻そうとしているなか、むしろ行き場を失っていく両替商たち。彼らが激動の時代をどう生き抜くのか。これは特別な体験が出来そうだとわくわくしました。だってこの戯曲がなければ、私が彼らの存在に想いを馳せることなどなかったでしょうから。

小難しい本かなと身構えましたが思った以上に読みやすく、「アクション」という短いト書きで唐突に始まる闘いのシーンも、初めは新鮮に感じました。

ところが、異なる思想を持った者が対峙し、さあ面白くなるぞ・・・というときに、必ずこの「アクション」というト書きが来て、やたらと闘いをおっぱじめてしまうので困りました。作者はアクション系の劇団の方で、劇団のために描き下ろしたと後に伺い、納得しましたが、これほど多層的な面白い題材を単なる「AとBの対立」という構造の羅列で見せてしまうのは勿体ない。ト書きに隠された部分を、独自の素晴らしい着眼点で深めてほしいです。

審査会では、大賞に相応しい候補作として最終的に『量子の歌声』と『サヨナラ、我が家』の二作に絞られました。

私をはじめから『量子の歌声』を推す形で選考に臨みました。子宮を宇宙船に見立てた設定に多少興味を抱いたとしても、もし今作が「命を終えた魂が再び生まれかわるまでに経由する”中間世の宇宙”で、自らの過去世を振り返る」というだけの話なら、若年世代の作家にありがちな自分探し系？と、さほど惹かれなかったかもしれません。でも、”生まれてくるかも知れなかった可能性たち”が、偶然と必然の境目で、最終的にひとりの命を力強く地球へと送り出す場面に、「ああ、そうして私も生まれてきたのかもしれない」と胸を掴まれてしまったのです。粗さ拙さ、量子力学へのツッコミどころなどの欠点も霧散してしまう、不思議な感動を味わったのです。

『サヨナラ、我が家。』は、他の審査員のご指摘にもあったとおり、物語を牽引するはずの長男「春樹」という人物が見えてこないという点がやはり気にかかりました。また、せっかく親、子ども、孫と三世代が登場するのに、孫たちが係累を示すためだけの存在で

終わってしまったのもすこし残念でした。それでも、光るエピソードがありました。たとえば、妊娠を隠して帰省した娘を責めず、ジャムパンを分け合って食べる親子の姿。カレンダーに母が残したメモ書き。笑いながら泣き出したくなるような、ささやかな眩しい時間の積み重ねが、家に刻まれていることがよく伝わります。生活の細部に光を当てる描写や、押しつけない優しさを湛えた両親の人物造形は作者独自の魅力で、高く評価したいと思いました。

二作の最終投票は僅差で、この票数の割れもそのまま伝える形で発表しようという結論に至りました。

満場一致がいかに難しいか、審査会のたびに思います。でもそれこそが戯曲というものの面白さですね。山口さん、おめでとうございます。